PDF Compressor Free Version

美濃・尾張を壊滅させた濃尾震災

復興に立ち上がった岐阜の人々

死者、不明者約2万8千人という大震災が東日本を襲いました。マグニチュード9・0という大地震に続く津波、そして原子力発電の恐ろしさを世界中に知らしめました。

しかし、今から120年前、私たちの住む濃尾平野でもマグニチュード8・0とも8・4とも推定される直下型大地震がありました。本州、四国、九州にまで広がるもので、これは先の「東日本大震災」以前のものとしては最大級のものでした。

根尾谷にできた断層

1. 震源地は根尾谷

明治24年（1891）10月28日午前6時37分、大きな地響きとともに「濃尾大震災」が発生しました。

震源地は本巣の根尾谷で、内陸に起きた直下型地震としては世界的にも最大級規模の大地震でした。この時できた根尾谷断層は地表に現われたもので80kmに及び、断層のずれは最大8mでした。

「へえともないことになったやと気が付いたが、おっかはんはどこへ行ったかしらんと、またよう探いて見たらすぐそこに死んどったんや。書居に首を押さえられて、びしゃっと煎つくばいしたまま板場に伏さっとるんや」（古老談）

根尾・水鳥にできた湖

根尾谷では、山崩れが多発し、土砂が流れを塞ぎ、湖がいくつもできる状態でした。根尾谷筋に散在する大河原、板屋、樽見、長峰、金原、佐原などの村々の被害は言葉に尽くせないほどでした。11月、12月になっても余震が続き、ゆっくりと寝ることもできませんでした。

2. 各地の様子

地震が起きた時は丁度朝食時だったため、岐阜、大垣、笠松、竹鼻、関などの市街地では家屋の倒壊と共に各地で火災が起き、見渡す限り灰と瓦礫の山となってしまいました。

〈岐阜の状況〉

「ものすごい地震が起こったかと思うと、あっという間に家が壊れて火災が起こった。たくさんの家が焼けてしまった。逃げたのは竹藪や伊奈波神社だったが、逃げてきた人たちが物を落としていったので、それに火がつき、伊奈波さんも燃えてしまった」（古老談）

「道に地割れができていた。地割れの穴に入るといけないので、逃げずって逃げた。地震の強さは立っていられないくらいで、地割れに挟まって死んだ人も多かった。金華山、水道山、権現山などの山も抜け、付近の家は潰れた」（古老談）

当時の岐阜は、この2年前の1889年（明治22）7月1日に東海道本線が全通し、同じ日に市制が施行されたばかりでしたが、できたばかりの岐阜駅も、長良川に架かる鉄橋も、焼けたり崩れ落ちたりして悲惨な状態になりました。

当時、岐阜市の人口は25676人、家屋は5852戸でしたが、その内なんと、死者250人、怪我人は700人に上りました。全壊、半壊家屋は3864戸でしたが、火災戸数は2225戸を数えました。

岐阜市伊奈波神社前

厚見郡、方県郡、各務郡、山県郡など、周辺農村部でも、実に9割以上の家屋が一瞬に損壊しました。あちこちの堤防でも、亀裂、損壊、崩壊など、大きな被害が出ました。

当時の様子は、岐阜日日新聞や大阪朝日新聞の号外記事で詳しく知ることができます。

・8千戸余の家屋など一度に倒壊した。県庁、師範学校、裁判所、病院、郡役所等も倒壊した。

・地震によって発生した6箇所からの火災によって、旧岐阜町をはじめ加納に到るまでの殆どが消失している。

・わずかに消失を免れた病院の庭に臨時の診療所を設け負傷者の治療に当たっている。

焼失した岐阜市街

・師範学校、岐阜公園、上加納で炊き出しをしている。

・今も余震が続き、ゆっくりと寝ることもできない状態。

・市民は再震を恐れ、町外れの桑畑や大根畑で野宿している。

・九死に一生を得た人達は公園、梅林、県庁前、病院前、美江寺観音堂前、中学校前の田畑、西別院境内、大宝寺などで障子、戸、焼け残った建具を使って雨露を凌ぐだけのものを造って生活している。地面にむしろなどを敷いて寝ころんでいるだけの者もいる。

・飲料水がない。井戸水も川も濁り水となっている。

仮小屋での生活

〈大垣の状況〉

興文小学校の「震災小誌」には、安八郡大垣町戸数4597戸の内全壊2419戸、全焼937戸、死者789人、重傷1270人とあり、興文尋常高等小学校区1885戸の内1240戸が全壊、194戸が全焼、184人が死亡、166人が重傷を負ったと伝えています。

岐阜日日新聞や大阪朝日新聞では次のように報道をしています。

・長良川鉄橋は振動のため300尺余が落下した。

落ちた長良川鉄橋

・大垣に興行のために来ていた力士小柳一行15人の内3人は逃げることができたが、他の12人は倒れた家の下になって死亡した。

・全町4300戸の内3400戸が丸潰れとなった。

・死亡者は7、8百人に上り、負傷者は1300人に達している。火災は市内4箇所から発生し、3千余戸が焼失した。

・臨時の病院が大垣小学校内に設けられている。

・この日は東本願寺において親鸞聖人命日ということで、前日より泊まり込んでいた多くの人達が、倒れた建物の下になって死亡した。

〈笠松、竹鼻、北方、高富などの状況〉

・笠松、竹鼻は震災と火災によって死傷者多数に上り、岐阜や大垣と比べても人口比例からすれば笠松や竹鼻の方が多いくらいである。・強い風が吹いていたため、火事は大きくなり、渡船場あたりの家屋を全て焼き尽くしてしまった。

・木曽川の堤防から見ると、殆どの家屋が倒壊している。わずかに笠松の木曽川堤の傍に建つ「四季の里」は倒壊していない。これは屋根が茅や板で葺いてあったことによるもので、瓦葺きの建物は殆ど倒壊している。堤防も殆ど陥没している。

・北方町、美江寺村、文殊村、穂積村などが最も被害が大きい。

・北方町は数戸を残し全て倒壊している。本巣席田郡をはじめ多数の圧死者が出ている。

・鳥羽川に添って土地が陥没し、高富村から東・西深瀬村にかけて湖と

PDF Compressor Free Version

笠松の惨状

高富村の人家倒壊

なっている。

・田畑が陥没し、1メートルほどの段差ができ、道もずれている。

・高富村の圧死者は93名、高木村は30名、東深瀬村は15名、西深瀬村は12名である。

〈県内、全国などの状況〉

この大地震で、岐阜県では約9万戸が倒壊し、5千人以上の人が亡くなりましたが、岐阜県だけが被災したわけではありません。

同じ濃尾平野にある愛知県では、2600人以上の死者、そして全壊約8万5千戸、半壊5万5千戸という甚大な被害が出ました。かなり遠くの大阪府で23人、静岡県でも3人など、全国では約7880人もの人が亡くなりました。

3. 報道・救助・救済

当時、テレビやラジオ等情報伝達手段が発達しておらず、「富士山崩れる」「北海道移住説」などデマやうわさが飛び交い人心が混乱し、社会不安が広がりました。

そんな中で人々が正確な地震情報を得ることができたのは、写真や石版画を掲載した新聞社の「号外」でした。3日後の10月31日の大阪朝日新聞号外や11月2日の岐阜日日新聞号外には、かなり具体的な被害状況が報じられています。

11月12日の岐阜日日新聞は、あまりの被害の大きさに「慈善家に告ぐ」という題で、全国から送られてくるお金や品物に感謝しつつ、更なる寄付を呼びかけました。

そんな中　全国53の新聞社が募集し県内外から寄せられた義援金は14万1383円にもなりました。　地震発生後、県や市町村は、役所や警察が多くの人たちを動員して、救助活動などに当たりました。また市内に充満した数千人の負傷者を救助するため治療所を設け、市内の医師を招集して手当てをさせました。更に、各地に炊出所を設置し、被災者の救助にも努めました。

この炊き出しで最も困ったのは米の確保でした。「また地震が襲う」などといった流言飛語のため貯蔵している米を手放さなかったり、たとえ供出しようにも、倒壊した蔵から米を掘り出すのが困難であったりしたためです。また、こうした状態に目を付け、米価を吊り上げようとする米商人が現われたりもしました。

岐阜県立病院大小手術の図

県は、11月15日には「震災救済本部」を設け、義援金品の授受等に当たりました。救育所には、震災で身寄りをなくした人、病弱な人、老人などの自活困難な人、両親を亡くした子供などが収容され、食事や衣服などが支給されました。

また、11月末までに、県下30箇所に臨時病院（治療所）が設けられました。各地の臨時病院では、治療に当たる医師や医療機器の確保が課題でしたが、県内各地の開業医、ボランティアとして全国から駆け付けた医師や看護婦たちの活躍で乗り切りました。

困ったのは腸チフス患者が大量に発生したことでした。これは、粗末な仮小屋に多数の家族が起居を供にしたり、汚れた水を飲んだりしたためと思われます。

このような公的な活動以外にも、民間のボランティア団体、宗教団体など、多くの人々が積極的に活動しました。

4. 復興、そして西別院事件

この年の12月までに震度6の烈震9回、強震78回、弱震1726回を記録するなど、余震は数か月間にもわたり続きました。しかし、そんな中でも、人々は復興に向かって立ち

上がりました。

倒壊した家屋の廃材から使える瓦や木材を拾い集め、仮設の住宅を建てました。本巣では、倒壊した校舎の柱や梁、瓦を片付けさせ、12月に仮校舎を建設し、12月末には、ござを敷いて授業を再開しました。岐阜師範附属小学校でも12月1日より授業を始めるなど、どの学校も復興に向けて頑張りました。

大小河川の崩壊あるいは大きな亀裂が生じた堤防の復旧は急がなければならない課題でした。4～5か月後に融雪出水季節を控え、低地を多く抱えている美濃地方にとってはなおさらでした。

長良川堤防復旧工事の様子

そのため、県も国も迅速に対応をしましたが、技術力、大型機械のない時代で人手に頼ることが多く、多くの村人が参加し、総出で復旧工事に当たりました。

しかし、県が取った救済、復興の対策には県民の理解が得られなかったことも多くありました。県知事の小崎利準は、国からのお金150万円の内、救済費としてはわずか10万円しか充てず、大部分を木曽、長良、揖斐三川堤防の修理工事に使おうと考えていました。

11月23日、岐阜公園に多くの民衆が集結しました。席田、本巣、方県、山県、厚見各郡の農民及び岐阜市の市民などで、その数、600～700人程でした。これらの人々は、岐阜公園や伊奈波神社で次々と集会を開き、「復旧土木費の給付、3年間の賭税免除、商工業資金の年賦返済を条件とする貸与を国会、政府に請願すること」などを決議していました。

この集会で、県会議員らが、議会において、震災救済費改善の案は知事の反対にあい良い結果が出なかったことを告げると、「我が郡は目下困窮が甚だしい。10万円を請求する」と発言する者があり、それをきっかけに「我が郡も」「我が郡も」と人々が叫び始め、「これより直ちに県庁に行き知事に面会し救済費百万円を請求しよう」と、800人程の群衆が県庁前に押し掛け、知事に面会を求めましたが、警官が駆け付けて解散させられてしまいました。

翌24日、500人程が岐阜西別院に集まりました。境内を埋めた黒山の群衆を見て、警官が解散を命令したことから群衆の怒りが爆発し、境内で大混乱が起こりました。石が飛び、木切れが舞い、傷つく者、逃げ惑う者。警官は剣を抜き、群衆を蹴散らし追い払いました。そして、請願運動者、西別院闘争者など100人以上を逮捕しました。これが「西別院事件」と言われるものです。

この西別院事件の後、震災に対する本格的な救済と復旧が始まりました。県予算の12倍にも当たる総額456万円というお金が国から出され、被災者救助と復旧作業に充てられたのです。

今から120年も前に、「自分たちの生活と故郷をもう一度取り戻そう」と、濃尾平野を襲った世界的規模の地震から立ち上がり、懸命に復旧させた人々がいたのです。

○この文章は、「岐阜県史」「岐阜市史」「濃尾地震写真資料集」「写真で見る濃尾震災ー実態とその復興ー」「私たちのみた京町百年」「1891濃尾地震報告書」「市制政120周年記念ー岐阜市民のあゆみ」などを参考にして、後藤征夫がまとめました。

岐阜県の主な断層